

# 巴 杏

三次地区医師会報

No.167

令和元年 11 月発行



# 外科医のメスに国境はない その2

～荒瀬秀俊 伝～



荒瀬秀治 著

溝田忠人・溝田武人 編集

## 2.10 祖父・秀俊は英語力を発揮して2段階の手術の説明をした

祖父は患者の診察を終え、あからさまに疑いの目を向けるオランダ人スタッフに向き合い、通訳を通すこともなく、直接彼らスタッフに英語で説明を始めた。おそらく医師同士の話に通訳を通すことで余計に手間がかかることを考えた結果であろう。自分が診察した結果から、どのような手術を行うべきかを彼らに告げた。児玉婦長も院長が英語に堪能であることは知っていたが、実際英語で会話しているところは見た記憶がなく、院長の新たな面を目の当たりにした。その時代、あるいは土地柄からも、外国人医師と話す機会など滅多にあることではない。聞き入っているオランダ人スタッフを見て、落ち着きを取り戻せていると感じて、それまで緊張に縛られ続けていた児玉婦長の気持ちも落ち着いたようだ。

祖父はオランダ人軍医等に概ね次のように語った。患者の状態について、「癌などの悪性腫瘍を否定できないため、根治術にまで持って行けるかどうかは、開腹してから判断する。いずれにせよ、今すぐに一次的にでも行うべき手術は栄養状態の改善を目的とした

手術である。まずは食物を胃から腸へ進める手術（バイパス術）を行い、体力を回復させた後、改めて閉塞させている原因を切除（根治手術）する。」この手術の段取り、手順、についてはさほど珍しい方法でもなく、消化器外科ではこのような症例に行う一般的な対応であり、この見解にはオランダの軍医にも異論はなかったものと思える。

不安のぬぐえない軍医達に対して、「外科医のメスに国境はない」と英語で伝えた。果たしてどう英訳すれば再現できるのか、婦長はしゃべっているところを憶えていたがその文章までは記憶していない。

“Surgeon’s mes has no borders.”

本当のところの英文は不明である。こんな「決めぜりふ」がここで出るとは！その言葉を聞いた患者がどう感じたか、恐怖や不安が強すぎて、その瞬間、どれほどの安らぎを彼女にもたらしたのか分からないが、彼女は院長の言葉をはっきり覚えていたと後から語っている。

編集者注1：Surgeon’s knife knows no

borders. が通常の英語の会話であろうとのMahieu Jean Marie氏のアドバイスを受けた。また文献<sup>8)</sup>では祖父は“患者を救う仕事に国境はない”と診察した、となっている。辞書によるとmesはオランダ語でもそういう、だが伯父に限らず当時の医者ドイツ語を学んでおり、ドイツ語のMesserを日本人の多くがメスと発音しオランダ人には通用したであろう。

## 2.11 病院・オペ室・手術台へ、そして児玉婦長の心が伝わった

患者を病院へ運び、婦長はすぐに準備を始めた。朦朧とした意識状態のまま患者は、オペ室へ運ばれ、手術台に横たえられた。立ち会いを希望したフレーデ軍医と看護婦二人の計三人が、患者に寄り添い、励ましの言葉だろうか、声をかけている。

祖国オランダから遠く離れ、縁もゆかりもない日本の片田舎で、しかも自由を奪われた患者は心細かった。死の恐怖に耐え続け、諦めかけた回数と同じだけ励まされながらも、やっと手術台に横たわることが出来た。手術を待つつかの間、呼びかけた児玉婦長に、消え入りそうな意識で、弱々しくわずかに開いた瞼が、視線の先に婦長を捕らえた。婦長はいつもの手術前と同じように「心配ないですよ」と声をかけながら手を握った。患者はわずかに握り返した。国籍は違うものの婦長と同じ年代で同じ職業の女性同士、人間同士の触れあいから出た感情だったのだろう。余計なことを付け加えさせて頂くが、婦長は外国語に長けていたわけではない。従って「心配ない」の下りは純粋な日本語でしかも広島訛りが存分にちりばめられた言葉だったことは言うまでもない。一瞬和んだ空気が手術室に流れた。

## 2.12 日本軍関係者のその一言に婦長は愕然

同じ部屋の手術台から少し離れた窓際で、いつもと同じ手術の準備を急ぐ婦長のそばに、付き添ってきた見張り役の軍関係者らしき男が、周りを気にしながら近付き、小さな声で語った言葉に婦長は愕然とした。

「婦長さん、捕虜ですけい、まあ、どうなっても、ええですわ。」

これが日本軍の戦争中の意識であり、非戦闘員であろうとなかろうと敵国の人間であれば、命に対する尊厳など、毛ほども持ち合わせない態度が露呈した。今始まろうとしている手術に対しても、日本軍関係者の考えにはぶれがない。乱暴な言い方だが、この一貫しているところが、また恐ろしい。この日本軍関係者がこの期に及んで続けて口にしたのは「献体にしますけい」であった。勝ち目のない幾多の戦場で、多くの夢を抱えたまま、散っていった日本兵がこのような意識の日本軍関係者の指揮下にいたとすれば無念である。徴兵され亡くなられた日本兵の冥福を祈らずにはいられない。

この瞬間、婦長を慌てさせたのは、もし患者自身あるいは監視役のオランダ人に、聞こえたとしても、その日本語は理解できなかっただろう。しかしこれが祖父の耳に入っていたら、どうなっていたか……。幸いにも祖父の耳に入ることは無かった。もし祖父の耳に入っていたら、婦長はそれ以上語らなかったが、私が経験した幼い頃の思い出から想像するに、相当に大変なことになっていたと思う。圧倒的な正義感とプライドの持ち主であった祖父は、患者を始め周囲の人々から、「怖い先生」と思われていた。子供や弱い立場の人には優しく、当時、祖父に限ったことではなく、全ての開業医が同様であったように、支払いの困難な患者から治療費を取り立てるようなことは決してしなかった<sup>2)</sup>。

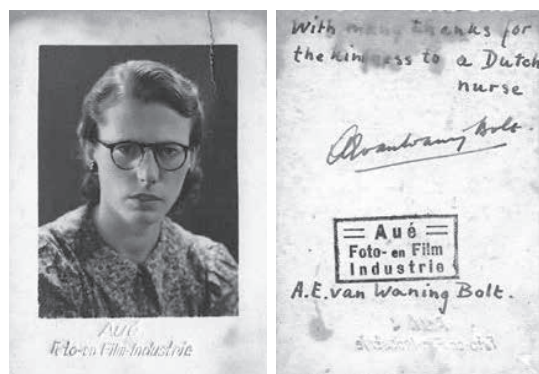
平静を取り戻したオペ室に、執刀する祖父が入ってくる。立ち合いのオランダ人医師や看護婦と同様に、いや患者自身はそれ以上にどんな手術をされ、助かるのか、このまま見ず知らずの場所で人生を終えてしまうのか、このような心配が巡ったことだろう。

## 2.13 祖父の自信、手術の結果

祖父には自分が行う手術は最良の方法であるとの確信があった。経験と技術に裏打ちされた自信は揺るぎないものだった。オランダ人医師達は手術が進むうち次第に言葉を失った。それは彼らが勝手に想像していた手術とはかけ離れて高い技術水準であった。祖父の指先の動きを目で追う眼差しは、普段祖国で彼らが行っている手術技術を、完全に凌駕していると感じた。もちろん助けてもらった立場上リップサービスの延長かも知れないが、終戦後、祖国オランダにおいて、オランダ人医師達は『すばらしい手術をする日本人外科医、ドクターアラセ』と最大の賛辞でたたえ、感謝を表してくれたとのことだ<sup>4)、5)、6)</sup>。何かあれば、すぐにでも自分たちが交代して手術のイニシャティブをとる積りで、技術は自分たちの方が上だとの意識があったであろう。祖父の手技や理論は、オランダ人医師にもまだ無く、その時代に行われた最善の手術であった。手術前のわずかな時間の会話、祖父の話を遮るようなオランダ人医師のしゃべり方は、対等以上の立場であるとのオランダ側の自負に基づくと児玉婦長には感じられた。敵国の医師がまともに対処してくれることはありえないと考えていたからだ。

その2か月後に2度目の手術を受け、最悪の状態を乗り越えた患者のオランダ人看護婦、ブラウワさんは、最終的に健康を取り戻した。そしてスタッフ全員と共に、終戦後、無事に三次を離れ、祖国へ帰ることができた。「絶

対に生きなければならない」という患者の強い信念と、「絶対に助け、共にオランダに帰る」と支援を続けてきたオランダ人の医師達を初めとした全乗組員の思いと行動があった。その結果、あれだけの逆境を克服できて、それが祖父の治療につながり、生き抜けたのであった。祖父は、終戦後帰国する直前のオランダ人医師など10名余りを自宅に招いて送別会を開いたそうである<sup>8)</sup>。



三次の捕虜収容所に収容されていたA.E.ファン・バニング・ボルトさんの写真。オランダに帰国後に手紙で送られてきたもの。裏面にはオランダの看護婦のために優しくしていただいたことに感謝するということが書いて署名してある。

## 3 祖父・荒瀬秀俊と家族のことなど

### 3.1 東京から三次に帰るまでの生活

物心ついてからの私は両親と東京で3人だけの暮らしをしていた。兄・秀賢は私や両親と離れて、三次の祖父母の所で幼児期を過ごしていた。当時の父は現在の研修医のような存在で完全無給医局員のインターンという制度の元で医学の研鑽を積んでいた。それを終える頃の多忙な毎日であったので、私が眠っている時間にしか帰宅しない。私はほとんど母と二人きりの静かな日々を過ごしていた。私達が東京から三次に戻って来た幼少期の私にとって、祖父は、接したことのない“人類”



であった。

编者注：秀治君が父母と3人で大船に住んでいる時代の父・秀隆兄は、インターンとして東京医大で研鑽中であった。下記<sup>14)</sup>～<sup>17)</sup>のように学術論文と学位論文を著わしている。また、その後、三次ロータリークラブの会長（昭和46、47（1971～72）年）を務めている。

### 3.2 祖父の時代の荒瀬病院

祖父の若い頃は、時代的にも外科の開業医は珍しい存在であった。広島市であれば、広島医専病院が総合的な外科疾患（内臓、脳、整形など）に対処可能であったろう。その他、広島市内の個人開業医でも土谷外科病院などは受け入れ可能であったと思われる。当時外科治療の必要がある患者は、県北はもちろん島根県あるいは岡山県との県境あたりからも、祖父の治療を受けるため来院したそうだ。

その頃は医専病院の外科も現在の医学部付属病院ほど細分化されてはいなかった。手術の種類、臓器別に、教授、助教授（現在は准教授）、講師、助手（同じく助教）のそれぞれに専門を任せた形で『外科』が成り立っていたようだ。従って、医学生は外科に入れば腹部外科も整形外科も全てを一人で行えるように研鑽を積むのは当たり前のことであった。その意味から考えれば、祖父の知識や技術も、現在の我々が到底及ばぬ広がりを持っていた。この時代だから逆にそうならざるを得なかった。少し違うのは、祖父はそれに見合う以上の医学知識を開業後の並外れた努力により獲得していた点であった。

### 3.3 祖父の時代と「盲腸」の手術

祖父は、明治28（1896）年に広島県双三郡川地村下川立（現在、三次市下川立町）で生まれた。



三次市下川立町の旧荒瀬邸 昭和36年8月撮影

東京医専に学んで、父、荒瀬一基から医業を受け継いだ。「昭和」に代わって間もない昭和3（1928）年の32歳の時、三次町会から招聘されて当時としてはまだ珍しかった『外科病院』を西中町に開設、その後、内町に移り、昭和18（1943）年には現在の「荒瀬医院」がある三次町栄町に50床を備えた外科病院となった<sup>2)</sup>。

『急性虫垂炎』、いわゆる「盲腸」も、抗生剤が発達していなかったひと昔前までは、一般的には開腹して虫垂突起を切除する手術を行っていた。それ以前、祖父の若い頃には、施設も外科医の数も絶対的に不足していたので、一般には『死』に結びつく疾患と考えられていた。事実、その頃の多くの患者は不幸な転帰を余儀なくされていた。祖父は当時としては新しい治療である虫垂突起切除術を広めた。しかし、「手術」自体当時は身近なものではなく、手術を受けるため、「水杯（みずさかずき）」と呼ばれる儀式で患者は家族に別れを告げて病院に向ったという。今となっては滑稽にさえ思える。祖父は「外科」の必要性を感じていち早く外科の治療を行える開業に取り組んだ。その結果『急性虫垂炎』は、命を落とすような大変な病気ではなく、手術で完治し、退院後もとの生活に戻れること、そして元気な姿で再び働き始めた人が増えて行くことを示した。広島県北において外科手術の信頼性を高めていった。

### 3.4 祖父と英語趣味

祖父は海外へ留学した経験はない。しかし英語が堪能であった。今でこそ英会話の出来る人はたくさんいるが、当時は珍しがられる存在だった。祖父は医学を学ぶ前から、英語に長けており、学生時代の教科としての英語も得意であったと聞く。当時、医学を学ぶ上で医師に求められる外国語はドイツ語が主流であった。それをマスターした上で、祖父はこれから医学を学ぶために必要になるのはアメリカの医学で、英語が必要となってくると考えていたらしい。私が小学生の頃、祖父の所へ月に一度送られてくるある郵便物は他とは違った外装だった。表には英語の小さな宛先ラベルが貼り付けられていた。小学生の私がこの郵便物を祖父の元へ持って行く係だった。これはアメリカの有名な外科手術雑誌で、その鮮やかな包みもハサミを使わないと開けられないほど上質の紙の雑誌で、やたらと重かった。祖父は67歳というまだこれからという年齢で亡くなったが、ちょっとした時間も、老眼鏡越しに、辞書を片手に、もう一方に虫眼鏡を持って、この雑誌の紙面を追っている姿をよく目にした。

### 3.5 気まずい食事時

私の家族が東京から三次に帰って来てからは、兄を含む、まさに3世代同居であった。病院スタッフも交えた大家族生活が突然始まった頃のことである。

共に食卓を囲んだ父・秀隆と叔父・敏博の兄弟には、朝・昼・夕の食事の場は、逃れることのできない祖父による英単語試験タイムとなった。楽しいはずの食事の時間は大人になってさえ二人にとって地獄に等しかった。医学用語であれば外科医同士の仕事に関する会話の一部として、容認できようが、母や兄玉婦長によると、出題される問題の多くが食

卓に並べられた食材など、例えば「なす」や「きゅうり」等、目につくもの手当たり次第であった。英語で答えられなければ、そこで厳しく勉強不足を咎められ、正解でほっとする間もなく“スプリングは？”と来る。周りの“正しく答えて！”と祈るような想いも通じることはほとんどなかった。楽しいはずの食事は、味わうという本来の姿からはほど遠かった。小さかった兄も私も詳しいことは分からないため、できれば楽しくと思うさやかな希望もむなしく、祖父を除く大人全員の食欲が萎えていく空気に巻き込まれていった。父や叔父はいかにその場から早く離れるか、その一点だけに集中し、ものすごいスピードで食べ終わると『ごちそうさまでした』を言い終えるより早く姿を消すのだった。



父・荒瀬秀隆



叔父 荒瀬敏博

### 3.6 祖父の趣味

#### 3.6.1 祖父との生活がはじまった時

一緒に暮らすことになった当時の祖父の年齢は60歳そこそこ、精力的で、外科医としての仕事はもちろんであるが、見逃せないのは、仕事の情熱の原動力になっている多様な趣味である。6～7歳の私にとって、全くそれまで経験したことがなく、好奇心は大いに刺激を受けた。今にして思うと、大変男らしさに溢れた愛すべき人物であり、多くの趣味によって自らの人生を謳歌し、優れた知識と技術を自己研さんで物にした明治生まれの外科医であった。小学校の高学年、10歳くらいからだろうか、祖父のやっている医師としての仕事以外のことに少しずつ興味が湧き、夕食

後は祖父の部屋に入り浸った。

### 3.6.2 祖父のメスの製作

私にとって祖父の日常の中にあって理解できるまでに長期間を必要としたもの、それは祖父が執刀する際使用するメスを自ら作っていたことであった。グラインダーや砥石でメスを研ぐ様子を初めて目にして私は不思議だった。その私に、「これを見たことがあるか？」などと、祖父はその道具の使い道を丁寧<sup>ていねい</sup>に教えてくれた。最後に「わしが作ったんでー」という。当時の私は、実際何に使う道具なのか、「刃物」と言う言葉も、ましてや何を切るものかも分かっていなかった。

今となっては、はっきりと覚えているわけではないが、いくつかの記憶を抜き出してみる。まず作業する祖父が左手で握っていた“T字型のハンドル”；本物の鉄道レールを30cmほどに切断した“金床”（ハンマー台）；そのすぐ奥に炭<sup>おこ</sup>を熾した状態で待機している小さな“かまど”；さらに“水をたたえた器”などである。全て私には珍しく、後年、TV画面で見た刀鍛冶の仕事に酷似していたことを知った。それはもう刀鍛冶そのものであった。鞆（ふいご）のT字型ハンドルを前後に動かすと、煽（あお）られた空気が炭火を真っ赤な炎に変える。ヤットコで把持された鋼が、炭火と同じ色になるまで熱せられると、素早く取り出す。金床の上で形を整えるため、槌で叩き、まだわずかに赤みの残る状態で、器の水の中へ無造作に突っ込む。そのとき勢よく立ち上がる水蒸気と不規則に踊る湯玉、時々、自分めがけて飛んでくる鉄くずから大袈裟に体を捻って「熱いっ！」と叫ぶ。すると「静かにせー！熱うはないっ！」と決めの一激がくる。実際皮膚に張り付き慌てて払い落とそうとするが、不思議なことに少しも熱さを感じない。祖父の言っている通りであった。

メスを作る工程は、子供の目には全て特別のもので、飽きることはなかった。また、この次に控える『研ぎ』の工程は別の意味で、桁外れのダイナミックな驚きだった。現在われわれが使うグラインダーはコンパクトにできている。しかし祖父のものは、机ほどの高さ、廊下いっぱいの幅、ほぼ立方形の鋼鉄のフレームのむき出し（今様に言えばシー・スルー）に組まれていた。その重厚なセットの底部のモーターの回転はプーリーとベルトを介して上部のグラインダーへと伝えられた。これでメスの形が整えられれば機械を止め、最後に砥石により研ぎ上げられる。これが最終工程の「刃付け」作業であり完成である。

研ぎ終え仕上がったメスの刃を上に向け、目線よりやや高い位置にかざして、光をすかして刃先に神経を集中させる。このできあがりを確認するような仕草がかっこよかった。鼻メガネ越しに、上目遣いをこちらに向ける祖父の表情が懐かしい。

現在外科医が使用するメスは殆どが替刃式のもので切れ味は良く、その点では問題になることはない。当時のものは柄と刃の部分が一体になっており、手術で使用するときは消毒する前に磨ぐ必要があった。祖父の手によるメスは、危ないからということで絶対に触らせてはもらえなかった。磨き上げられ、白く光を反射する刃先のシャープさが子供の私には怖い程で、自分から触る気にはなれなかった。

祖父は、明らかに毎日が野戦病院並みの仕事量をこなしていたからこそ、この趣味への傾倒振りは、皆が容認した特権であった。この趣味への没頭振りは、男であれば皆があこがれるに違いない。これに限らず他の趣味においても、そこで使用する道具類に関しては、全てが超一流の銘品ないし特注品、舶来品が並んでいた。高額であることは分かっていた



も、はっきりした値段は誰も知らなかったようだ。

### 編集者補足1：荒瀬秀俊が作製した外科医のメスが里帰り

以下の3枚の写真(写真 補足1a、b、c)は、秀俊が作製した手術用メスと鉗子類である。これらは秀俊の没後も荒瀬病院で永く使われ、その後も保管されていた。1996年1月から4月30日まで行われた宝塚市手塚治虫記念館のブラック・ジャック展で展示された。展示に至った経緯は、荒瀬秀賢の友人でアニメ版ブラック・ジャックの監修を担当されていた永井明氏(作家・医師、広島県三原市出身、平成16(2004)年逝去)が東京医大で秀賢と同級生ということで、仲介された。展示後、これらのメス・鉗子の一式は、手塚プロダクションに20数年間保管されていた。秀賢の他界にともない、妻・妙子がこのことを思い出し、当時の関係者に連絡を取った結果、この度、無事に古巣の荒瀬病院に戻った。荒瀬秀俊手作りのメス類(写真 補足1b、c)。中にはARASE又はMADE BY ARASEと刻印されているものが見える。使用目的に応じて切っ先の形、握りと歯の部分の角度等が微妙に違う工夫がなされている。



補足1a 荒瀬秀賢の診察机に帰って来た荒瀬秀俊作製のメスや鉗子類



補足1b 秀俊作製のメス1



補足1c 秀俊作製のメス2

### 編集者補足2：荒瀬秀俊の頭部解剖図模写とラウベル解剖学教科書の発見

編集作業の過程で、著者秀治の兄、故荒瀬秀賢の妻・妙子が自宅の古い資料を整理している際に、人体頭部の精緻な解剖スケッチを見つけた。妙子は、祖父秀俊の手になると思われるこの図を、「あまりに精密で驚きだ、編集の役に立つのではないかと、武人に預けた。(→最終カラーページ参照)

この解剖スケッチは秀俊伯父が学生時代(大正5-10(1916-1921)年在学)および卒業後の数年在籍した東京医専時代になにかの解剖学教科書の原画を参考にして模写したに違いない。その頃すでに発刊されていた



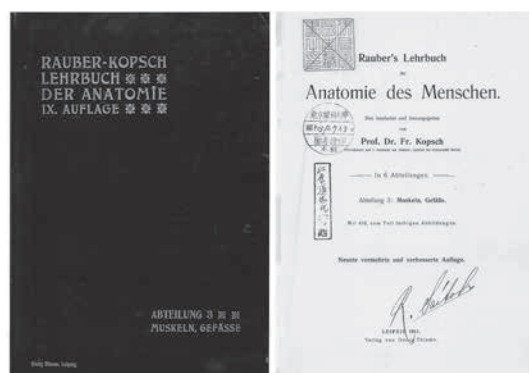
解剖学の本では 그레이の解剖学(1858)が有名であるが、同書にこのスケッチの原画は見出せなかった。大学の医学部図書館に、探索を依頼したが簡単には辿り着けないようであった。そこで、東京医大図書館であれば伯父が模写した解剖学の本がある可能性もあると思い問い合わせた。しばらくして東京医科大学図書館の戸村裕菜氏から以下のような返信を頂いた。

「学外倉庫に保管していた資料の図版と、荒瀬先生の模写が一致しました。荒瀬先生が模写なさったのは、ラウベルの解剖学の本<sup>20)</sup>でした。添付の図版は9版(1911年発行)の、第3巻 p.87~98 の図版の模写である可能性が高いと考えられます。難しい調査でしたが、他の職員の協力も得て、何とか答えにたどり着くことができました。」

文献<sup>20)</sup>のラウベル解剖学教科書の出版元であるGeorg Thieme社からは快く転載許諾を頂いた。医局時代の秀俊がこの本を所持していたか、又は同時代の医局員からこの本を借りて、模写したのであろう。100年近く前の医学生活動の一端が見えてくるようで興味深い。



荒瀬秀俊 東京医専卒業写真



ラウベル解剖学教科書<sup>20)</sup>の表紙 表紙見開きの1頁目

#### 4. 児玉婦長の存在

児玉婦長は、祖父が開業した頃から婦長として勤務していた。祖父と父の医療活動を支えた荒瀬病院の婦長であったが、父の秀隆や叔父の敏博、さらには兄と私をもその晩年に献身的に支えてくれた人であった。手術で児玉婦長が最後に機器出しをしたのは私の父・秀隆の執刀においてだった。

父が体調を崩し誰かが荒瀬病院を手伝うことになり、大学で麻酔科の中心的ポストで仕事をこなしていた兄は、簡単に抜け出せる状況ではなかった。中心からやや外れたところで、仕事をしていた私は、まだ医師になって3年目くらいだったが、約一年間、三次に戻って診療に当たった。この間にも数例の手術を行ったが、さすがに80歳を超えた児玉婦長にとって、手術の支援は既に楽な仕事ではなく手術室に立つことはなかった。その何年か後に、三次に帰って病院を継いだ兄も、既にかなりの高齢であった児玉婦長の機器出しは経験していないようだ。

単純そうに見えるが機器の名前を全て記憶し、術者に命じられる通りに渡さなければならない。この器具の名前は驚くほど大変なもので、例えば鉋『はさみ』を使いたいとき、普通に考えれば、医師が『はさみ』と言え看護婦は躊躇なくはさみを手渡すだろう。しか

し実際の手術で使用する器具の中に、はさみだけでも別々の名前で、4～5種類セットされている。用途により使い分けが必要である。術者は手術中、それぞれの過程で使いたいのはさみを「はさみ！」とは言わず個別の名前で機器出しの看護婦に要求する。それに間違いなく対応できなければならないのである。それどころかベテランになれば執刀医の要求を先取りして用意し時間を省くのである。

当時、児玉婦長は手術室に入ることはなくとも、勤務時間には外来に出て、若い看護婦の指導や、対応の難しそうな患者の相手になったり、泣き続ける子供をあやしたりしていた。彼女なりに実にいろいろなことに対応してくれていた。彼女は、私が高校入学のため三次を離れ、20年後に医師として帰ってくるまでの空白を速やかに埋めてくれた。重要な情報源として大きな助けになったのである。

児玉婦長は、病院とこの地域の住民のための橋渡しのような存在で、長年の間に培われた様々なデータの質と量は群を抜いていた。例えば病院を訪れた患者本人のことは当然、その家族構成、経済状態、更に…恐らく我々では想像も付かない程のデータを持っていた。それが祖父の診療にどれほどおおきな戦力となったことだろうか。これは言い換えれば本人が周囲の人と、それだけ親しみをもって接することができていた結果であって婦長の人徳と言える。どちらかと言えば世間との付き合いに疎い院長一家と児玉婦長の貯えた情報がうまく結び合って、医療の上でも力を発揮したと思われる。児玉婦長のこれらの功績や一つの病院に勤め続けた年数を考えても、その他あらゆる面でも彼女の存在は全く院長の家族の一員であった。家族も全員がそれを認め、家族同様の生活を送ったことは当然のことであった。

彼女の経験たるや、医学知識はもちろんの

こと、祖父の殆どの手術において、第一助手としてサポートしてきた。私も兄も医師になり立ての頃、多くの支援を受けた。ひとえに祖父に鍛えられた結果ではあるが、婦長本人も相当努力したであろう。それだけ価値ある経験を誰かに話したかったであろう彼女の願望は私には分かるが、書き物としては全く残っていない。

医師や看護婦として、それ以上に人間として、卓越した技術と優しさで、オランダ人女性患者に接した。さらに不自由な想いに耐えていた全ての収容者に、差し伸べられた多くの支援関係者の代表者として、祖父とこの児玉婦長がいたことが事態を最高の結果に結びつけたのである。



児玉ハズエ看護婦長



昭和36年12月24日クリスマスの夜の荒瀬秀俊を囲む一家

画面右の学生服を着ているのが溝田忠人、その後ろにいるのが看護婦長の児玉ハズエさん。

そして左に一人おいて兄・荒瀬秀賢、後列左端に著者・荒瀬秀治。

中列左から2人目、眼鏡をかけているのが父・荒瀬秀隆、最前列、ケーキの前に祖父・荒瀬秀俊（歿5カ月前）、2人おいて、叔父・荒瀬敏博。

## 5 もし祖父の判断がなかったら

私が児玉婦長から聞いたこの大戦中の出来事は、決してよい条件ではない中で、患者を助け、最悪の結果は免れることができた。この結果は関わった多くの人に、一様の安堵感をもたらした。

戦争中、祖父達が収容中の敵国人患者に行ったこれらの医療行為が、もし非戦闘員収容者に対して適切な措置・管理を行わず、後手に回った治療により、命を落とすようなことになっていたら、彼らは仲間の死を、果たして黙認したでしょうか。恐らくあの状況で、巡回診療を怠り、再三の往診要請にも応じず、患者の状態をあそこまで重篤にってしまった日本軍の対応が黙って見過ごされたでしょうか？さらに要請を受け手術に加担したと

して祖父までもが戦犯として何らかの判決を受けていたのではないかと私の中ではこの一つの疑念が払拭できなくなった。特に以下に述べる東京裁判と原爆に関する論調に関連して思うのである。だからこそ、この問題に正面から立ち向かった祖父や婦長、またオランダ人収容者の関係者などのことを私の知る限り、史実として残して置きたいと考えたのである。

### 5.1 戦後処理の東京裁判

私がこのドキュメントを記しながら、どうしても考えてしまうのが、もし逆の結果に終わっていたら、その後、事態はどのような結末を迎えたであろうか、という点である。はたして何のおとがめもなく終わっただろう



か？日本の戦犯に対して行われた戦後の東京裁判のことを知って興味を持ったのは、歴史の授業からではなく、この祖父とオランダ人女性患者の関わりによるところが大きかった。記録映画により連合国側の裁判長が、あの時代、日本を戦争に導いた軍人や政治家の、いわゆるA級戦犯に対し「絞首刑に処す」と判決が言い渡される場面は同じ日本人として衝撃を禁じ得なかった。しかし、何度か見たり聞いたりするうちに、微妙に気持ちは変化していった。軍事路線を指揮し、広島、長崎への原子爆弾投下による人類史上、未曾有の犠牲と引き換えに、敗北を認めざるを得なかった。その日本の軍人および政治家等に対する極刑については、戦勝国である連合軍側主導の裁判について、異論や批判を唱える向きもあるが、ここで裁判についての意見や感想を述べるつもりはない。

## 5.2 原爆の終戦効果論について

多くの家庭がそうであったように、私の血縁にも、昭和20年8月6日当日、その瞬間まで、いつもと変わらぬ朝の慌ただしさの中で生きていた家族があった。その時、一発の爆

弾で何の抵抗もできず、一瞬で絶命した母の姉夫婦のことを語る母の無念さは、子供心にも辛く、深い悲しみとして理解できた。広島だけで十数万人の命を一瞬で奪った。スイッチ‘ON’から始まった地獄の無念の中で人々は亡くなっていった。

あるアメリカの退役軍人に、原爆について日本人レポーターが質問をする番組をテレビで観た。太平洋戦争の功績を示す勲章やピンバッジだろうか、着用しているシャツ全面を覆い尽くし、テンガロンハットをかぶった老兵は「敵国である日本人に、あれ以上の戦争犠牲者を出させないため、アメリカは原子爆弾を投下した」と言う。次に出てきた一言は「日本人は我々の使用した原子爆弾のおかげで終戦を迎えることができたのだから、むしろアメリカに感謝すべきだ」というのである。あまりに原爆の惨状を知らない人間の弁であった。広島の被爆をもう少し冷静に分析し、明らかにそれまでの兵器に比べ、桁外れのパワーにより爆死者が10数万人を超えた殺戮パワーを冷静に予見していれば、このような感想は生まれるはずはない。

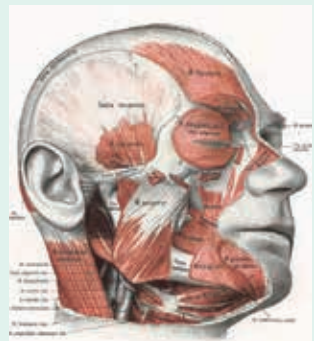
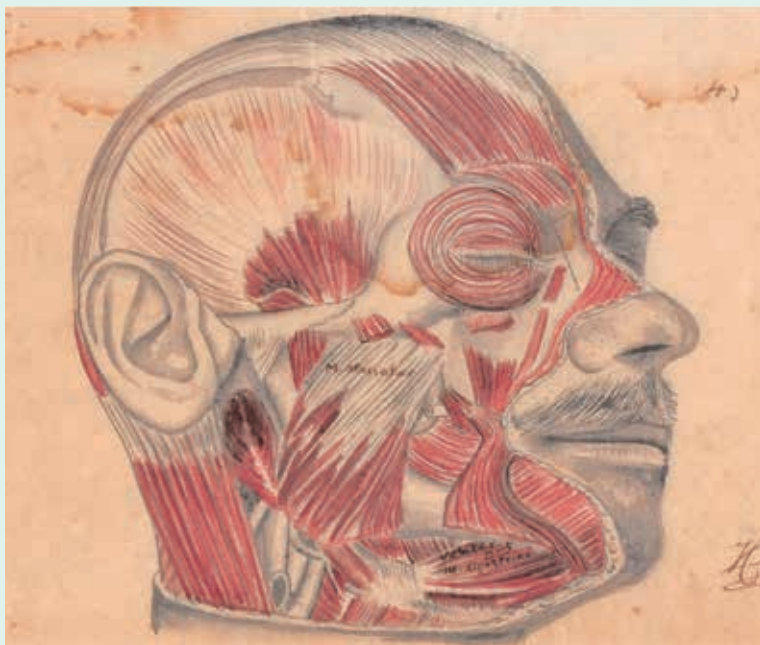
(以下次号)

## 引用文献

1. 溝田武人、荒瀬病院旧邸代主に関するある伝聞について、巴杏、三次地区医師会会報、No.164、pp.21-26、2018.10
2. げいびグラフ、巻頭人物風土記、荒瀬秀俊、(株)菁文社、第44号、昭和61(1986)年7月5日発行
3. 支局ノート、戦争の不条理伝える抑留所<三次>、中国新聞北部版p.27、平成12年、2000.9.8
4. 米丸嘉一、戦時中の三次捕虜収容所について-オランダ国立公文書館文書から-：三次地方史、第54号、2000.9.20三次地方史研究会発行
5. 平和を考える、三次英米人抑留所の貴重な写真、欧米流の交流の礎に、朝日新聞広島版、2009(平成21年)10月7日
6. 三神國隆、海軍病院はなぜ沈められたか-第二氷川丸の航跡-、光人社、ISBN4-7698-2443-2 c0195、2005.1.15
7. 「つらかった収容所の生活」オランダ人元捕虜32年ぶり三次訪れる、中国新聞、昭和53(1973)年1月29日
8. 朝刊コラム、ほのぼの欄、国境越えた良心のメス、中国新聞1990.2.2、p.26



9. 20世紀スポット、㊟三次の抑留所・捕虜収容所、戦時下に園舎が変ぼう、国境を越えて交流芽生える、中国新聞、平成12年、2000.8.29
10. 贅澤な“海の病院”、皮肉や自国の捕虜を満載輸送、抑留下の和蘭病院船、朝日新聞、昭和17(1942)年4月2日
11. 三次捕虜収容所スケッチ、オランダ人の鉛筆画、市にコピーを寄贈、中国新聞、平成29(2017)年6月1日
12. もうひとつのヒロシマ99、再建への鼓動26、被爆者に乾パン配る、中国新聞、昭和59(1984)年10月8日
13. 小宮まゆみ、三次の民間人抑留所をめぐるヤン・クーフエルデンさんとの交流、POW研究会、Dialogo JI、2018.01.18
14. 荒瀬秀隆、春山広臣：乳腺結核2例、日本臨牀結核、Vol.10、No.10,pp.546～548, 1951-10
15. 春山広臣、荒瀬 秀隆：腎盂輸尿管畸形に依る外科的疾患について、臨床外科、Vol.7、No.13、pp.773～774、1952-12
16. 荒瀬秀隆：発癌母地の立場から見た肺の慢性非特異性炎症病巣における気管支粘膜上皮系の変化に就いて、日本外科学会雑誌、Vol.58、No.9、pp.1406～1423,1957-12
17. 荒瀬秀隆：発癌母地の立場から見た肺の慢性非特異性炎症病巣における気管支粘膜上皮系の変化に就いて、東京医科大学、医学博士、学位授与年月日：1957-07-26
18. 米丸嘉一、戦時中の三次捕虜収容所－オランダ国立公文書館文書から－、げいびグラフ、ふるさと歴史物語、第85号、平成12(2000)年11月10日発行
19. 小宮まゆみ：敵国人抑留－戦時下の外国民間人－、吉川弘文館(歴史文化ライブラリー267)、2009.2
20. A. Rauber, et al., Lehrbuch der Anatomie des Menschen ; Abteilung 3: Muskeln, Gefasse. pp.87-98,Neunte Yermehrte und Verbesserte Auflage. Georg Thieme, Leipzig, 1911. (A.ラウベルら著：人体の解剖学教科書 部門3：筋肉、血管、pp.87-98、第9版は増加版と改良版を含む。ゲオルク・ティーマ社, Leipzig, 1911.)
21. 荒瀬敏博、親父、秀俊の思い出、東京医科大学同窓会 広島県支部の歩み、pp.131-134、1989
22. 東京医科大学百年史1916-2016、東京医科大学創立100周年記念事業記念誌委員会、平成30(2018)年。
23. オランダ人抑留刻んだスケッチ、朝日新聞大阪版夕刊、2017.6.24



## — 荒瀬秀俊の解剖図 —

荒瀬秀俊が「ラウベル解剖学教科書第3版(1911年発行)」：本文文献<sup>20)</sup>、の原図を模写した人体頭部解剖図6枚の内の3枚である。各図の右にラウベルの原図を転載する（ゲオルク・ティーメ社の転載許諾）。

模写は大正時代末頃のものと思われる。原図にはないひげが書き足されているのは秀俊の遊び心か？  
（本文『東西南北』参照）

補遺. 「Rauber's Lehrbuch der Anatomie de Menschen」<sup>20)</sup> の解剖図 (左) と荒瀬秀俊の模写 (右)

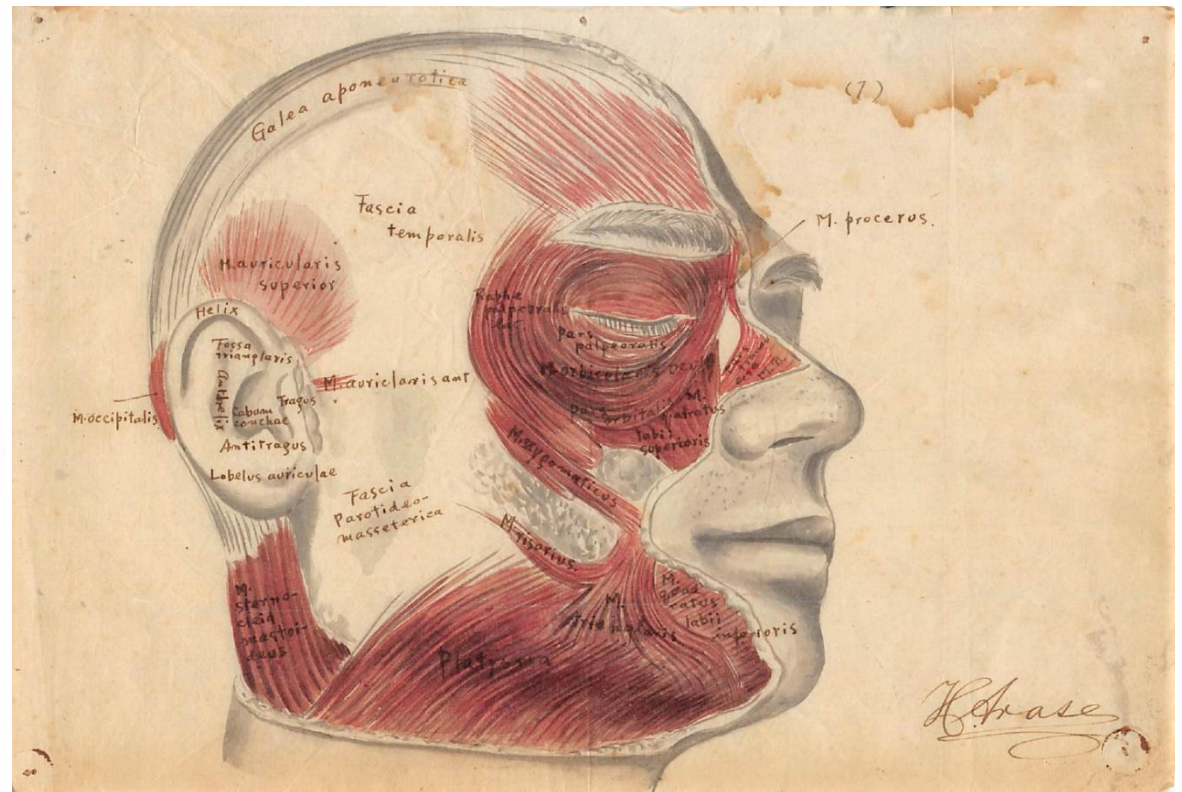
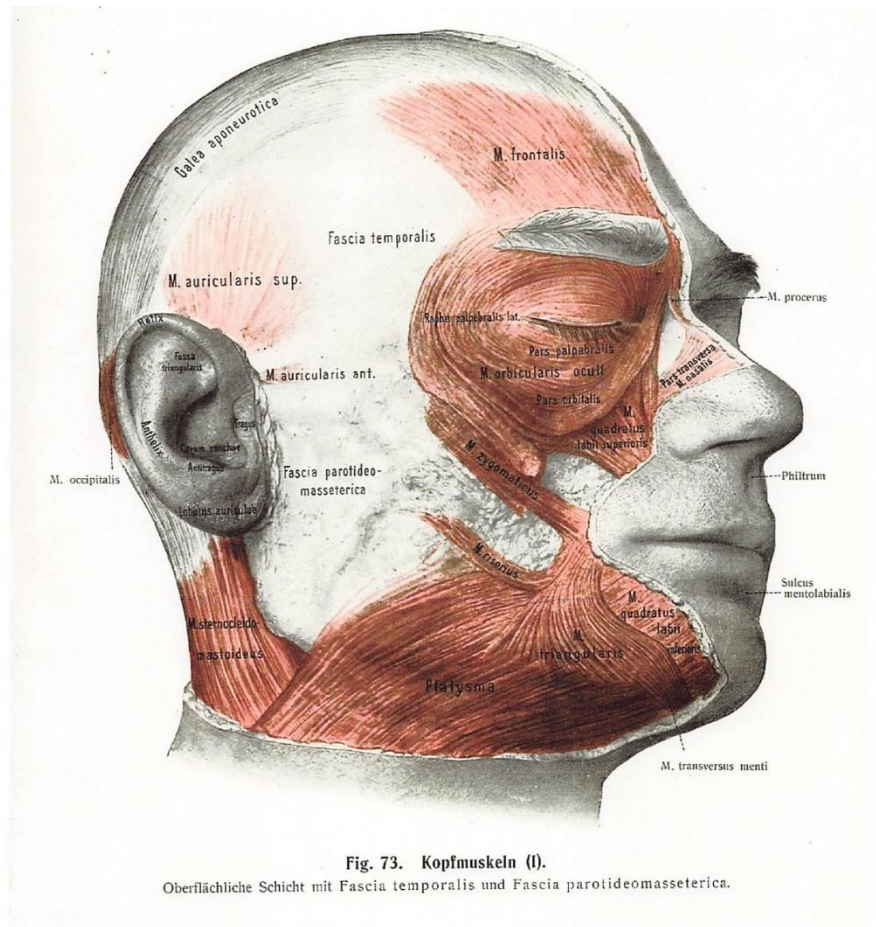


Fig. 73 (p. 87)



補遺. 「Rauber's Lehrbuch der Anatomie de Menschen」<sup>20)</sup> の解剖図 (左) と荒瀬秀俊のスケッチ (右)

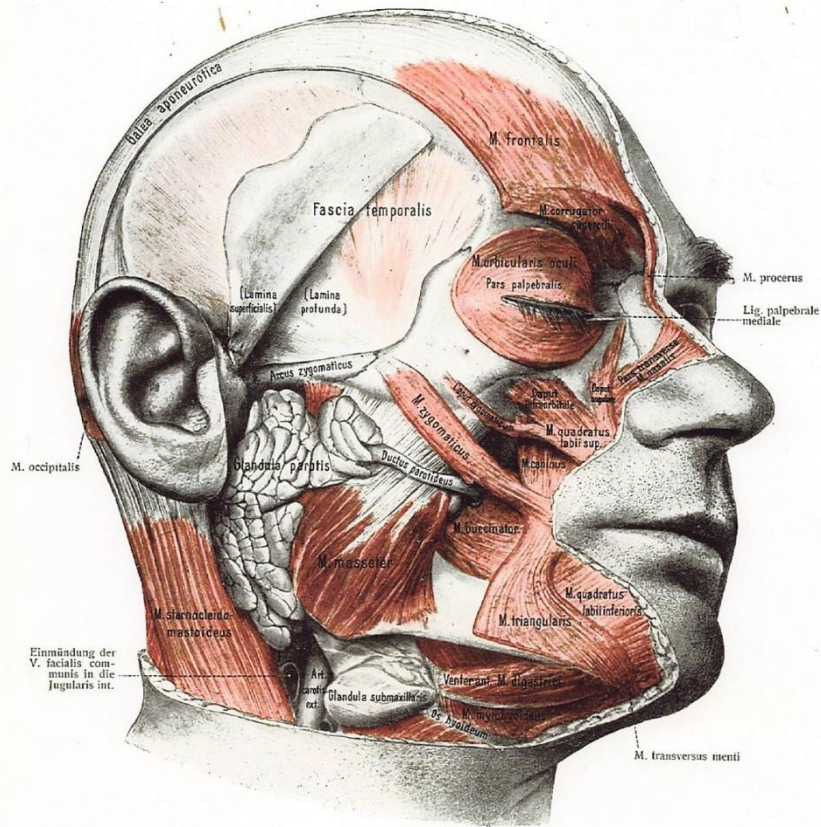
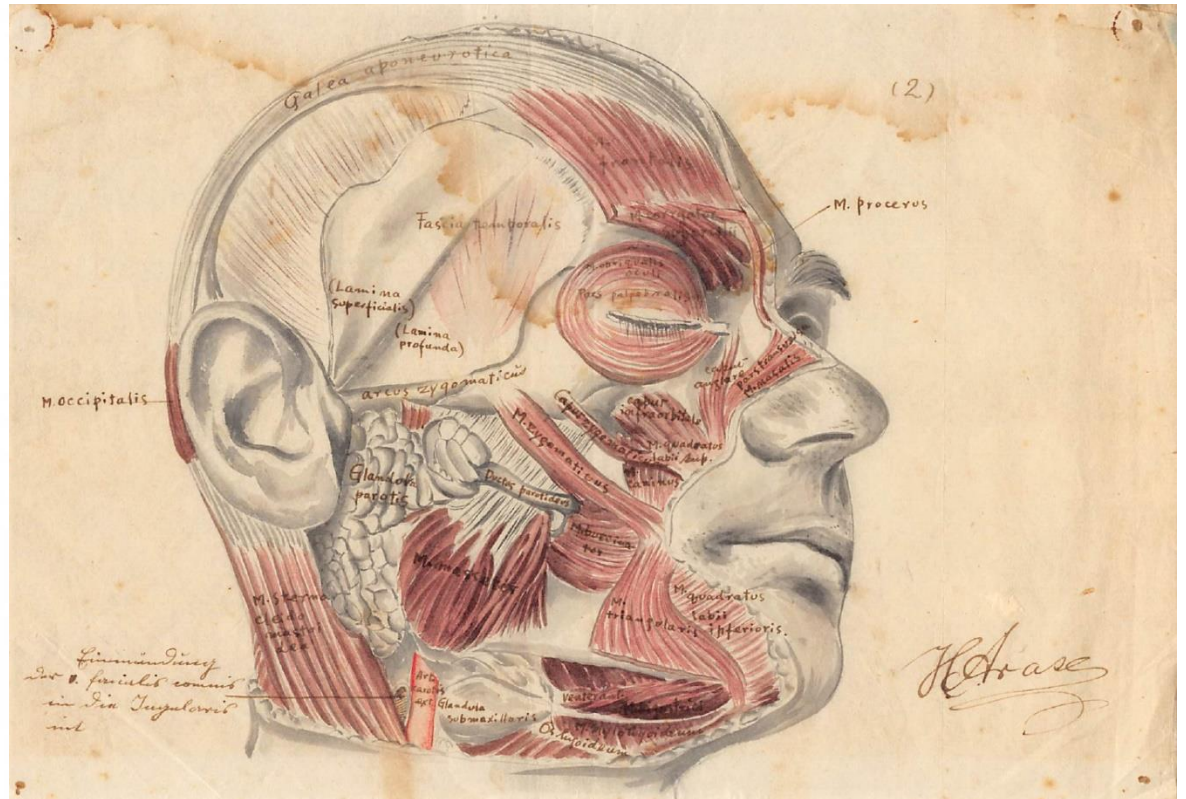


Fig. 74. Kopfmuskeln (II) und obere Zungenbeinmuskeln.

Nach Entfernung des Platysma, der Fascia parotidomasseterica, der Pars orbitalis des M. orbicularis oculi, des M. risorius. Das oberflächliche Blatt der Fascia temporalis ist vom Jochbogen sowie von der Linea temporalis abgeschnitten und nebst dem unter ihr befindlichen Fettpolster nach oben ungeschlagen.



荒瀬秀俊の模写 2



補遺. 「Rauber's Lehrbuch der Anatomie de Menschen」<sup>20)</sup> の解剖図 (左) と荒瀬秀俊のスケッチ (右)

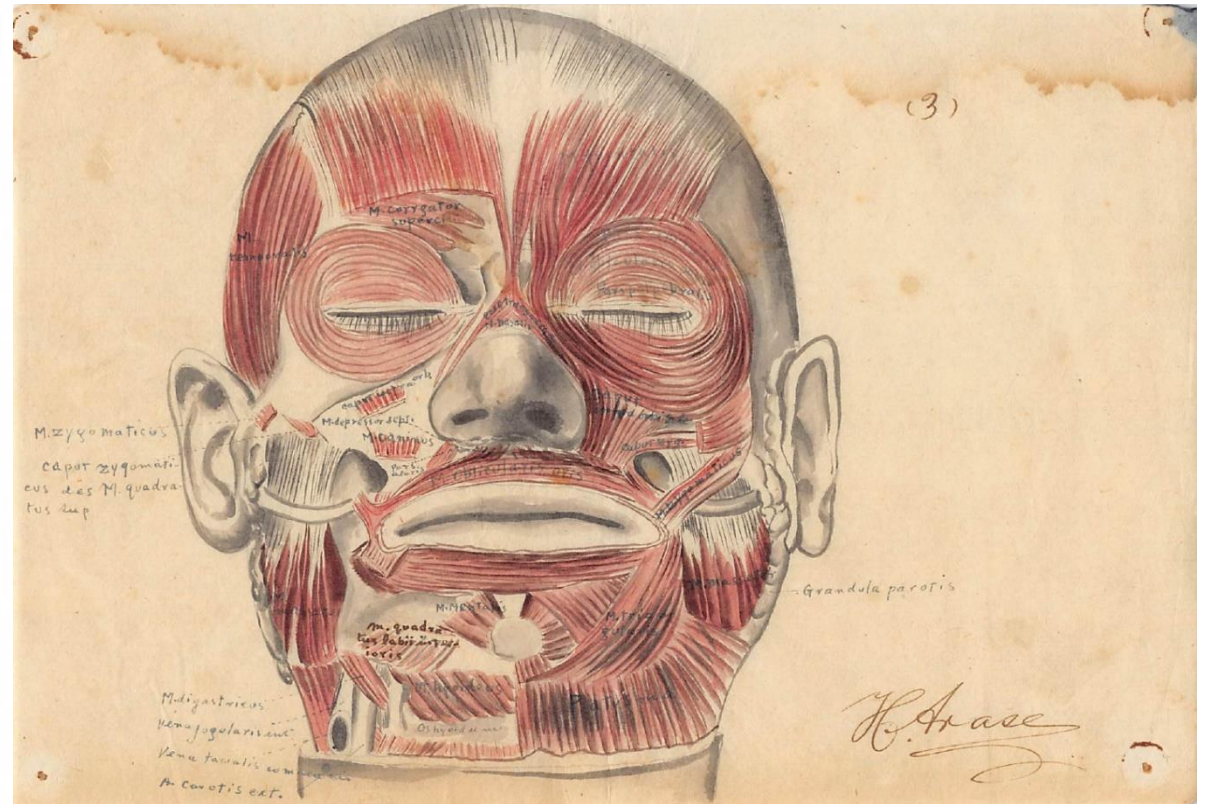
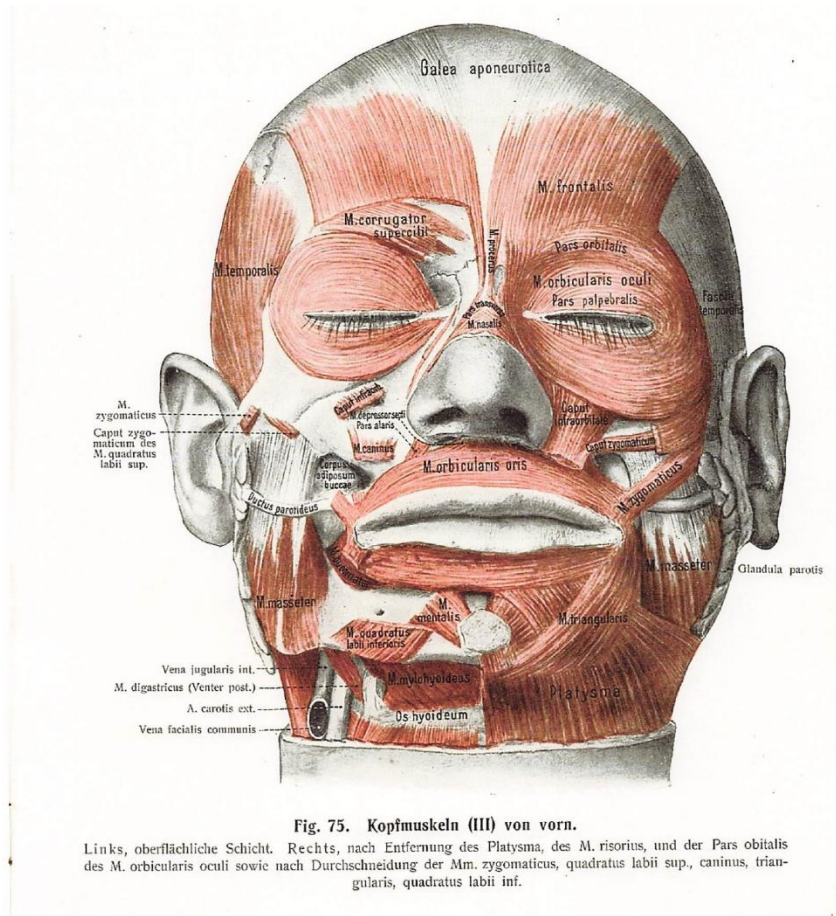
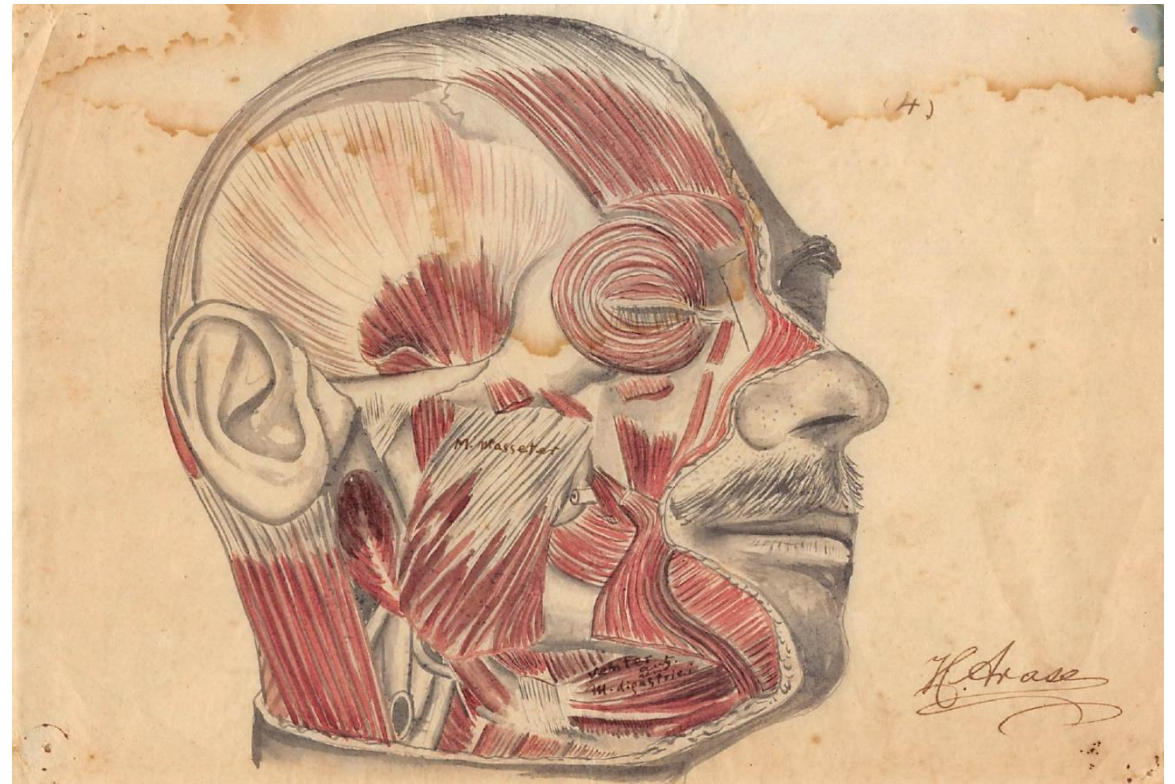
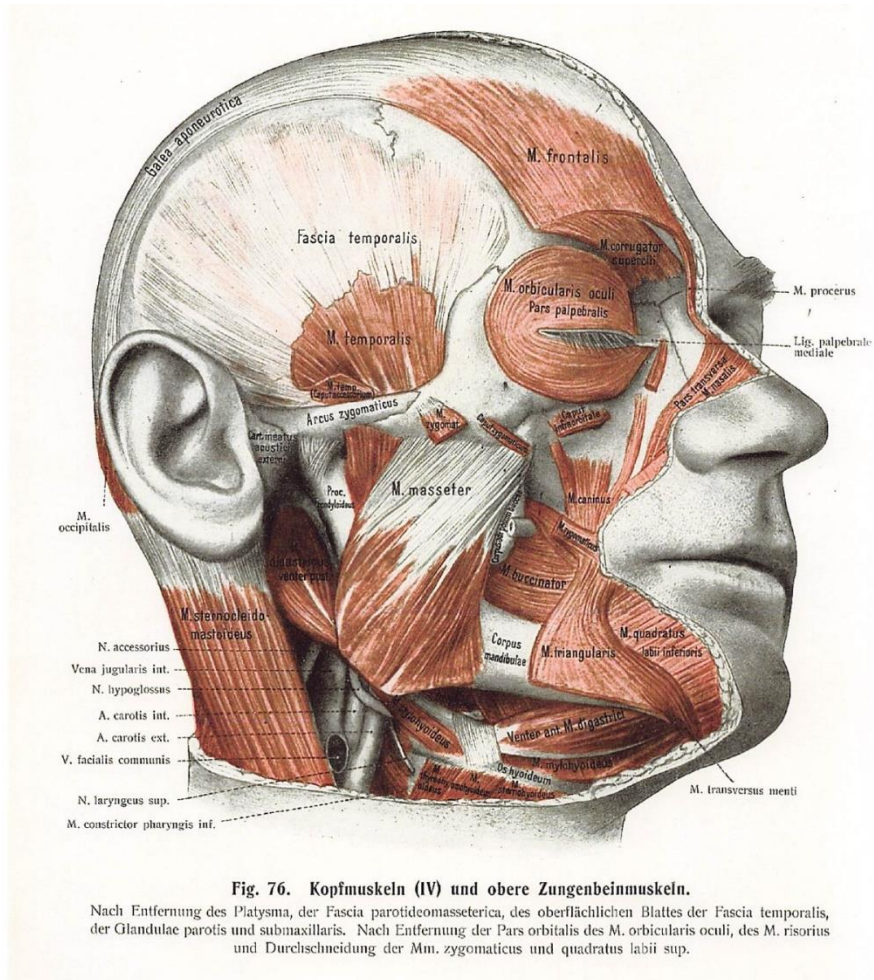


Fig. 75 (p. 91)



補遺. 「Rauber's Lehrbuch der Anatomie de Menschen」<sup>20)</sup> の解剖図 (左) と荒瀬秀俊のスケッチ (右)



荒瀬秀俊の模写 4

原書にはない口髭は秀俊の遊び心か？

Fig. 76 (p. 92)



補遺. 「Rauber's Lehrbuch der Anatomie de Menschen」<sup>20)</sup> の解剖図 (左) と荒瀬秀俊のスケッチ (右)

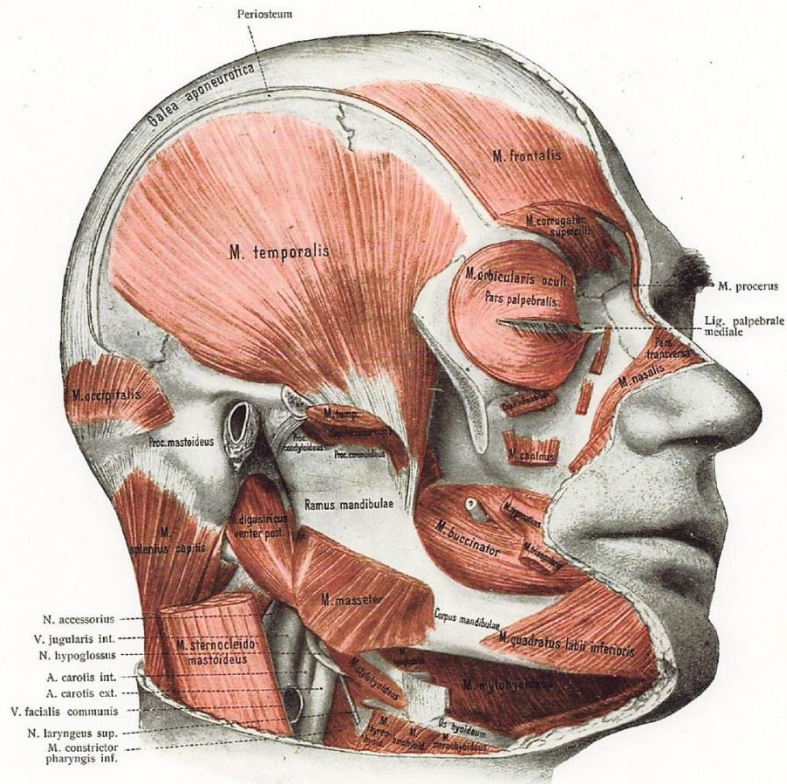
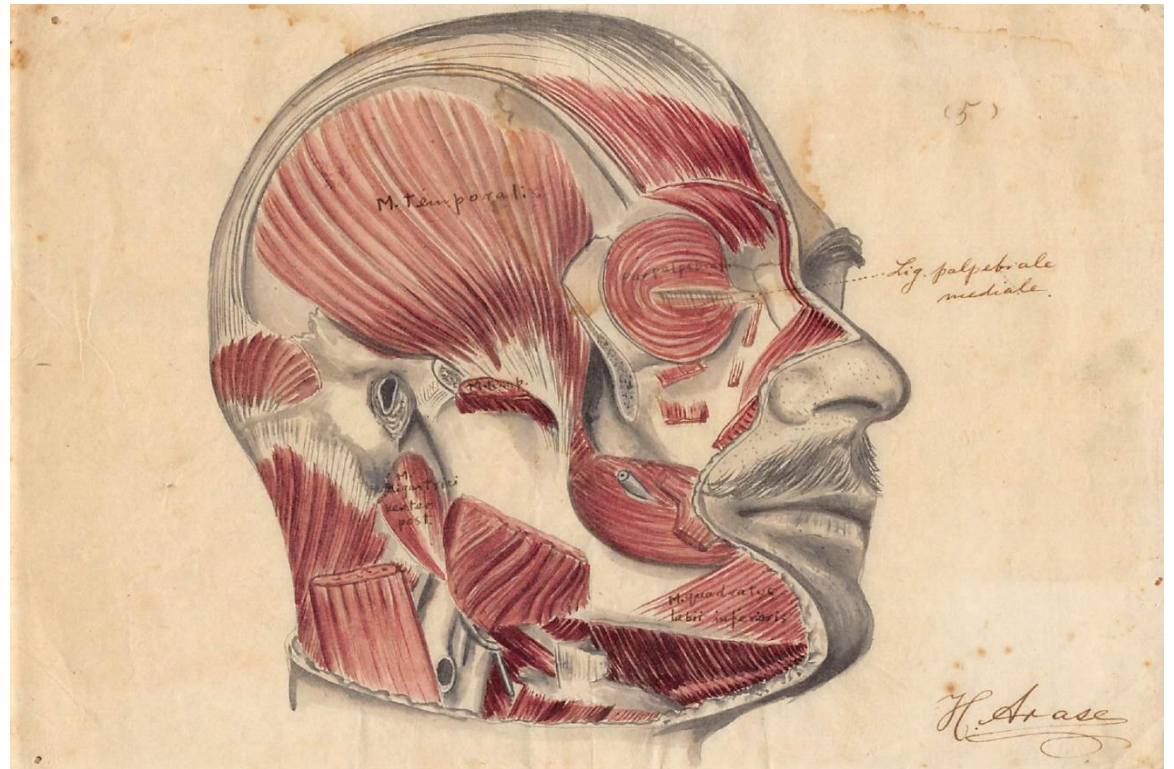


Fig. 80. Kopfmuskeln (V) und obere Zungenbeinmuskeln.

Nach Entfernung des Platysma, der Fascia parotideo-masseterica, der Fascia temporalis, der Glandulae parotis und submaxillaris. — Nach Durchsägung des Jochbogens und Entfernung des oberen Teils des M. masseter ist der M. temporalis ganz zu übersehen.



荒瀬秀俊の模写 5

原書にはない口髭は秀俊の遊び心か？

Fig. 80 (p. 97)



